

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第24号

平成28年3月15日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号
四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

朱舜水作 楠正行賛文 148文字略解文の訂正

人生自古誰無死。留取丹心照汗青

文天祥、過零丁洋から引用 元に滅ぼされた南宋の義士

朱舜水が残した楠正行公賛文については、通信第11号でその発見について、また通信第12号でその略解を掲載した。

しかし、扇谷が講師として開いた四條畷市立教育文化センター・市民教養大学講座「楠正行研究」（平成27年11月～平成28年3月）の中で、その略解について、一部訂正したので、改めて掲載する。

賛文の末尾に挿入されている、「人生自古誰無死。留取丹心照汗青」の句は、南宋の義士、文天祥（一二三六～一二八二）の七言律詩「零丁洋を過ぐ」の一節からの引用であることが分かった。

文天祥のこの句は、中国において、千年にわたって名句となっている。

過零丁洋の七言律詩は、以下の通り。

人生自古誰無死	じんせいいにしえよたれ な
留取丹心照汗青	たんしん りゅうしゅ かんせい てら

忠義至誠の心を貫く決意を詠う

この詩の前半は、国難に奔走して辛苦をなめたことから詠い起こし、国土と自分の悲惨なさまを述べ、後半は、地名を用いて現在の心境を表し、最後まで忠義至誠のここを貫く決意を示して結んでいる。

文意は、以下の通り。

経書を修めて仕官し、国難にあたっていろいろな辛苦艱難にあい、たてやほこを取って元軍と戦ったが、失敗の連続で早や四年も過ぎた。

国土は元軍に蹂躪され、柳の花が風に乱れ漂うようであり、また、自分の身も四方に流浪して、雨に打たれている浮草のようである。

皇恐灘のほとりでは、国家滅亡の罪を恐れて説き、零丁洋を渡っては、身の零落を嘆くばかりである。

人間生まれたからにはみんな死にいくものである。どうせ死ぬのなら、至誠忠義の心をしっかりと世に残し、長く歴史に輝かしたいものである。

1256年の科挙で主席となった文天祥

文天祥を語る時、中国の科挙制度に触れないわけにはいかない。

科挙は、六〇〇年ごろから一九〇五年までの間、約一三〇〇年にわたって中国で続いた、世界に例を見ない官吏任用制度である。

過零丁洋 零丁洋を過ぐ

辛苦遭逢起一經 しんくそうほういっけい 辛苦遭逢一經より起こる

干戈落落四周星 かんからくらく ししゅうせい 干戈落落たり四周星

山河破碎風漂絮 さんがはさい かぜじょ ただよ 山河破碎して風絮を漂わし

身世浮沈雨打萍 しんせいふちん あめひょう う 身世浮沈して雨萍を打つ

皇恐灘頭説皇恐 こうきょうだんとうこうきょう 皇恐灘頭皇恐を説き

零丁洋裏歎零丁 れいていようりれいてい なげ 零丁洋裏零丁を歎く

受験生は、地方で行われる「解試」、礼部で行われる「省試」を突破すると、皇帝から出される出題に臨む「殿試」を受け、合格者に順位が付けられ発表される。

成績順に、第一甲から第五甲のグループに分けられ、第一甲主席は「状元」、二番目は「榜眼」、三番目は「探花」と呼んで、その栄誉を顕彰した。

一二五六年の殿試合格者は六〇一名、そのなかの主席、第一甲状元として、その名が最初に読み上げられたのが二一歳の文天祥であった。

文天祥の生涯を貫いたのは、状元としての誇りがもたらす責任と不屈の精神であり、状元宰相が故の官僚特有の硬直した原理・原則主義でもあった。

元の総攻撃が始まると、義勇軍を指揮して臨安に入った文天祥は、宰相となって講話の使者に立つ。しかし、軟禁され、元への投下を迫られる。大都に連行途上、脱出に成功。逃避行の後、何とか亡命政権として持ちこたえていた南宋の副総理になるが、端宗が十歳の生涯を閉じると元軍はほぼ中国全域を手中に収め、文天祥は捕縛される。

正成、正行の最期と重なる文天祥

そして、元の張弘範は、一二七八年、文天祥を厓山に伴い、宋の残党、張世傑に降伏を説得させようと試みたとき、その返事として送ったのがこの詩。

この時、張世傑に降伏を進めるよう手紙を書くようにと脅迫されたが、文天祥は「吾父母（君主をさす）を扞るあたわず、^{すなわ}乃ち人をして父母に^{そむ}叛か^かしめて可ならんや」と言い、この詩を張光範に与え、頑としてこれに応じなかった。

その後、大都に連行され、幽閉された文天祥の変身を、フビライは辛抱強くじっと待った。

そして、牢獄での生活は三年の長きにわたり、いよいよしびれを切らしたフビライと直接対面した文天祥は、フビライ自ら「宰相に！」と請われるが、それを断り、「願わくば、死の一字を賜わん」と応え、その翌日、処刑された。

朱舜水は、中国を代表する義士の一人、文天祥と楠正行を重ね合せたのであろう。

征服王朝の元に屈することを良しとしなかった漢民族の文天祥。

一方、北朝、足利尊氏に屈することを良しとせず、南朝復権ただ一筋に生き抜き、至誠忠義を貫いた楠正行。

●朱舜水全集 稲葉君山編 東京文會堂書店

明治四十五年四月十七日発行

楠正行賛文

禮曰君父之仇不與共戴天齊襄復九世之讐春秋大之設呂小報大弱復彊益又難矣豫讓不能得志於襄子申胥所呂藉手於闔閭公乃能建義旗攻鳴鼓卷甲倍道潛師入都使所報者身踰垣而逃弟穴地而竄陷刃於其妻亦足呂落姦雄之膽矣斯無媿於枕戈之志可呂下報其父臨歿數言是父是子雖青年賣志芳名至今詩曰人生自古誰無死留取丹心照汗青其然其然

朱舜水楠正行賛文・略解（扇谷）

礼記に曰く、王や父の仇とは同じ天のもとに命ながらえず、と。

かつて、齊の襄公は紀の国を滅ぼし、九世前の復讐を成し遂げた偉大な人物と、孔子はその歴史書、春秋の中でこれを褒めたたえた。

しかし、小国が大国に仕返しをするのはもちろん、勢力の弱いものが強いものに仕返しをすることは極めて難しい。戦国時代の晋の豫讓は、主君の仇を討とうと体に漆を塗ってすさまじい姿になり、炭を呑んでおしとなって囊子を刺そうと諮ったが捕えられの身となり自殺した。だから、春秋時代の楚の申包胥は、呉の王闔閭の侵攻に対して秦の助けを得て破ったのである。

正行公は義を貫き、仇を討つという旗を高々と掲げ、尊氏の罪を挙げて責めたてた。鎧をしまい、昼夜いそぎ二日路を一日で走り、兵をひそかに移動させ都に入った。

しかし、尊氏は自ら垣根を乗り越えて逃げ、足利直義は地に穴を掘ってもぐり逃れ、尊氏の妻は自刃に及んだ。悪知恵にたけた尊氏らの肝を冷やしたことは間違いない。

正行公は矛を枕にして安眠せず常に武器を身から離さず、片時も国の事や父母の仇を忘れず、強い義の志を持ち続けて生き、

正成公が桜井の駅で遺訓として残した忠孝両全の言に報いる生き方をした。

偉大な正成公あって、偉大な正行公が生まれたのである。

正行公は、四條畷の合戦で討死をすることで、死後も帝そして父の仇を取るとい志、義を示した。その名声は、今も多くの人が知る。

南宋の義士、文天祥が謳った詩にいわく。人間生まれたからにはみんな死にいくものである。どうせ死ぬのなら、至誠忠義の心をしっかりと世に残し、長く歴史に輝かしたいものだ、と。

元に最後まで屈しなかった文天祥。南朝復権という至誠忠義を貫いた正行。

その生きざまはまさに同じである。

（文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭）